

読倫理教科書

福沢諭吉

青空文庫

過般、榎本文部大臣が地方官に向つて德育の事を語り、大臣は儒教主義をとる者にして、いざれ近日儒教の要を取捨して、学生のために一書を編纂せしむべしとのことなり。然るに、徳教書編纂の事は、先年も文部省に発起して、すでに故森大臣の時に（明治二十年）倫理教科書を草し、その草案を福沢先生に示して批評を乞いしに、その節、先生より大臣に贈りたる書翰ならびに評論一編あり。久しく世人の知らざるところなりしかども、今日また徳教論の再発にさいし、その贈書の草稿を左に記して、読者の参考に供す。

書翰

過般、御送付相成候『倫理教科書』の草案、閲見、少々意見も有之、別紙に認候。妄評御海恕被下度、此段、得貴意候也。

五月　　日

福沢諭吉

森文部大臣殿

倫理教科書の目的は、人の徳心を養成せんとするにあるか、ただしは人をして人心の働く

を知らしめんとするにあるか。けだし心理を知る者、必ずしも徳行の君子に非ず、徳行の君子、つねに心理学に明らかなるものに非ず。両者の間に区別あるは、もとより論をまたざるところなり。本書すでに教科書の名あるからには、これによりて少年学生輩の徳心を誘導して、純良の君子たらしめんとの目的なるべし。

然らばすなわち、徳行の条目を示し、人たるものはかくあるべし、かくあるべからずと、ていねい反覆その利害を説明して、少年の心を薰陶くんとうすること、德育の本意なるべきに、全編の文面を概すれば、むしろ心理学の解釈とも名づくべきものにして、読者をしておよそ人心の働くを知り、その運動の様さまを了解せしむるには足るべしといえども、これによりて徳心の発育を促すの効用いかんにおいては、いささか足らざるものあるが如し。

されども編末の備考に、「この書に載するところはただ倫理の要領のみにして、広く例を集めつまびらかに証を示すの業は、教師の本分としてこれを略せり。」とあるがゆえに、中学校、師範学校の教師が、本書を講ずるときに、種々様々の例証を引用して、学生の徳行を導くことならん。ずいぶん易やすからざる業なれども、しばらく實際に行わるべきものとしてこれにしたがうも、なお遺憾なきを得ず。

そもそも本書全面の立言は、人生戸外の公徳を主として、家内私徳の事には深く論及す

るところを見ず。然るに鄙見^{ひけん}はまったくこれに反し、人間の徳行を公私の二様に区別して、戸外公徳の本源を家内の私徳に求め、またその私徳の発生は夫婦の倫理に原因するを信ずるものなり。本来、社会生^{せいせい}々の本は夫婦にあり。夫婦の倫^{りん}、素^{みだ}れずして、親子の親^{しん}あり、兄弟姉妹の友愛あり。すなわち人間の家（ホーム）を成すものにして、これを私徳の美という。内に私徳の修まるあれば、外に發して朋友の信となり、治者被治者の義となり、社会の交際法となるべし。

けだし社会は個々の家よりなるものにして、良家の集合すなわち良社会なれば、徳教究竟の目的、はたして良社会を得んとするにあるか、須^{すべ}らく本に返りて良家を作るべし。良家を作るの法は、兄弟姉妹をして友愛ならしめ、親子をして親ならしむるにあり。而してその本源は、夫婦の倫理に發するものと知るべし。ゆえに少年の学生に徳を教うる教科書は、たんに私徳の要を説き、まず良家の良子女たらしめ、然る後に社会公徳の教に移るべきはざなるに、本書の立言、あるいはその要を欠くものの如し。

今かりに一步を譲り、倫理教科書中、私徳のことに説き及ぼざざるに非ず、「一家の間は専ら親愛をもつてなる云々、一夫一妻にしてその間に尊卑の幣を免かるるは云々」等の語さえあれば、私徳の要ももとより重んずるところなりと説を作^なすも、本書をもつて学校

の教科書となすにおいては、なお不可なるものあり。

およそ徳教の書は、古聖賢の手になり、またその門に出でしものにして、主義のいかんにかかわらず、天下後世の人がその書を尊信するは、その聖賢の徳義を尊信するがゆえなり。支那の四書五經といい、印度の仏經といい、西洋のバイブルといい、孔孟、釈迦、耶穌、その人の徳高きがゆえに、書もまたともに光を生じて、人とともに信を得ることなり。かりに今日、坊間ぼうかんの一男子が奇言はを吐くか、または講談師の席上に弁じたる一論が、偶然にも古聖賢の旨にかなうとするも、天下にその言論を信する者なかるべし。如何いかんとなれば、その言の尊からざるに非ざれども、徳義上にその人を信するに足らざればなり。

然るに今、倫理教科書は文部省撰とあり。省中何人なんびとの手になりしや。その人は果して完全高徳の人物にして、私徳公徳に欠くるところなく、もつて天下衆人の尊信を博するに足るべきや。諭吉においては、文部省中にかかる人物あるべきを信ぜざるのみならず、日本国中にその有無を疑う者なり。

あるいはこの撰は、一個人の意見に非ずして、一省の協議になりしものなりといわんか。とりもなおさず日本政府の撰びたる倫理論なり。然らばすなわち、今の日本政府を日本国民一種族の集合体として、この集合体ははたして徳義の叢淵そうえんにして、ことに百徳の根本

たる家の私徳を重んじ、身の内ないこゝ行を厳にして、つねに衆庶しゆうしょの景慕するところなるや
とうに、諭吉、またこれを信ずるを得ず。

あるいはいわく、倫理教科書は道徳の新主義をつくりたるに非ず、東西先哲の論旨を述べてその要を示したるまでのものなれば、その何人なんびとの手になり、また何の辺より出でたる云々の説索は、無益の論なりとの説もあらんれども、鄙見ひけんをもつてすれば決して然らず。貝原益軒翁が、『養生訓』を著わし、『女大学』を撰して、大いに世の信を得たるは、八十の老翁が自身の実験をもつて養生の法を説き、誠実温厚の大儒先生にして女徳の要を述べたるがゆえに然るのみ。もしもこの『養生訓』、『女大学』をして、益軒翁以下、尋常文人の手にならしめなば、折角の著書もさまでの声価を得ざりしことならん。

この他、『唐詩選』の李子鱣りうりんにおける、百人一首の定家卿ていかきにおける、その詩歌しがの名声を得て今にいたるまで人口に膾炙かいしゃするは、とくに選者の学識いかんによるを見るべし。わざかに詩歌の撰にして、なおかつ然り。いわんや道徳の教書たる倫理教科書の如きにおいてをや。たとえ述べて作らずとも、その撰者・述者に帰するところの責任は、もつとも重きものなりと覚悟せざるべからず。

されば今、これを公にして官公の学校に用うるにあたり、書中所記しょきの主義いかんに論な

く、大いに天下の尊信を博すべきや否やの一段にいたりては、諭吉の保証すること能わざるところのものなり。倫理道徳の書にして尊信の一大要義を欠くときは、たとえこれを教うるも、いたずらに論議批評の媒介となりて、学生中においても、ひそかに是非喋々の言を聞くことあるべし。

ここにおいてか、これを教うる者は、もとより少年学生輩の是非論を許すべきに非ざれば、陰に陽にさまざまの方便を用いて、その黙従を促さざるをえず。すなわち人に徳教を強ゆるものにして、その教のよつて来たるところの本源は政府にありという。諭吉は政府のためを謀^{はかつ}て惜む者なり。

ゆえに本書の如きは民間一個人の著書にして、その信不信をばまつたく天下の公論に任じ、各人自発の信心をもつてこれを読ましむるは、なお可なりといえども、いやしくも政府の撰に係るものを定めて教科書となし、官立・公立の中学校・師範学校等に用うるは、諭吉の服せざるところなり。いわんや書中の立言、公徳論を先にして私徳に論及すること少なきにおいてをや。少年学生等のために適したものというべからざるなり。

青空文庫情報

底本：「福沢諭吉教育論集」 岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年3月18日第1刷発行

底本の親本：「福澤諭吉全集 第12巻」 岩波書店

1960（昭和35）年10月1日初版発行

1970（昭和45）年9月14日再版発行

初出：「時事新報」 時事新報社

1890（明治23）年3月18日

入力：田中哲郎

校正：noriko saito

2009年6月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）に作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

読倫理教科書

福沢諭吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>